

ブーバー『我と汝』における直接的憎悪の意味

嘉目 道人(大阪大学)

よく知られているように、マルティン・ブーバー(Martin Buber, 1878-1965)は1923年の主著『我と汝』において、「我-汝(Ich-Du)」と「我-それ(Ich-Es)」という二つの「根元語(Grundwort)」(*IuD*, BMW1, 39)の区別を提示した。彼の対話の哲学は、物象化に通じる「我-それ」という態度よりも、二人称的に相手の存在全体を肯定する「我-汝」という態度の法が優位にあると説くものである。その射程は哲学的人間学や宗教哲学、社会哲学、教育哲学にも及んでいるが、『我と汝』はその出発点であるのみならず、その理論的な核心部分を成す著作でもある。

その『我と汝』の中から、本発表では「憎悪(Hass)」の概念を取り上げて考察する。「悪」や「罪責」とは異なり、「憎悪」の概念はブーバー哲学における頻出のテーマとは言い難く、『我と汝』においても、ごく短い箇所(47頁)において、「愛」との対比でついでのように言及されるに過ぎない。それゆえ、従来さほど注目されてこなかったように思われる。しかし、この箇所において、ブーバーは、憎悪と相手の存在の肯定・否定の関係という、すぐれて現代的なトピックについて論じているのである。本発表は、同箇所の読解を通じて、以下の2つのテーゼを掲げる。(1)ブーバーは、単なる盲目的憎悪とは区別される「直接的憎悪」の存在を認めている。(2)直接的憎悪は、相手の存在あるいは自分の存在を否定することを求める態度であるが、実際にどちらかが否定されてしまえば霧消する。

人間と神、および人間同士の関係において、「我-汝」という態度を象徴するものは愛であり、ブーバーは、悪霊に取りつかれた者と自らの愛弟子に対するイエスの感情の違いを例に挙げながら、諸感情とは一線を画した根元的な態度ないし構えとして愛を位置づけている。しかし、こうした愛の特別視に対しては、愛とは相容れないが愛に匹敵するほど根元的に思える態度も存在するのではないか、という反論が仮想的に提示される。それが憎悪なのである。

これに対するブーバーの再反論は、ごく短いものであるが、しかし容易に理解できるものではない。彼によれば、相手の存在全体を見ない「盲目的愛」は真の愛ではない。一方、憎悪は本性上盲目である。つまり、憎悪は、盲目的愛には匹敵するが、しかし「我-汝」の態度に相当する真の愛と同じ次元にあるものではない、というのだ(vgl. ebd.)。「我-汝」は自らの全存在をもって相手の全存在を肯定し、それと向き合う態度である一方で、「我-それ」は存在の一部しか見ない態度である。それゆえ、盲目的愛も(盲目的)憎悪も、「我-それ」の態度に属する諸感情にすぎないことになる。ここまでであれば、理にかなった説明だと言える。

ところが、その直後では、相手の全存在を見ていながら「我-汝」の態度を取れない場合があることを認めている。「人間には、向かいあっている人間に対して、あの、語りかける相手の存在への肯定をつね含んでいる根元語[=「我-汝」]を語り得ないことがあり、相手かさもなければ自分自身のどちらかを拒否せざるを得ないことがある」(48)のだという。ブーバーは、そのような人間はもはや憎悪の領域にはいないとしているが、しかし同じ段落の最後では「直接的に憎悪する者(der unmittelbar Hassende)」(ebd.)は愛も憎悪もない者よりも「我-汝」関係に近いところにいるとしており、このとき念頭に置かれているのは明らかに盲目的憎悪で

はない。つまり、ブーバーは、真の愛に完全に伍するものではないが、しかし単なる盲目的憎悪よりも根元的な、「直接的憎悪」という態度の存在を認めていると考えられるのである。これが、本発表が掲げる第一のテーゼである。

この特殊な憎悪が彼自身の対話思想のどこに位置付けられうるのかを見て取ることは容易ではない。管見の限りでは、同書にも、他の著作においても、この直接的憎悪が主題化されている箇所は見当たらない。主要な先行研究においても同様である。したがって、直接的憎悪はそもそもブーバーにとって(そして彼の思想の研究者たちにとっても)関心を惹かれるものではなかった、と考えるのが妥当であろう。

とはいえ、彼はそうした態度の存在自体は認めているというのも事実である。そして、「相手かさもなければ自分自身の存在を拒否する」とは尋常ならざる態度であることが明白であり、現代社会が抱える諸問題を考える上で有用な視座を与えてくれるものでもある。それゆえ、本発表では敢えてこの態度を取り上げ、分析を試みる。

少なくとも、直接的憎悪は単なる「我-それ」への頹落である盲目的憎悪とは区別されるべきである。たとえば、ブーバーは同書の別の箇所で、ナポレオンは何百万もの人間にとって、「汝」という呼びかけに対して「それ」で答える「デモーニッシュな汝」(78)であったとしている。もしそうであれば、ナポレオンは終始、相手の存在全体を見るのがなかった、あるいは、「汝」に応答する「我」ではなかった、ということになる。それはつまり、ナポレオンが抱く憎悪は、常に盲目的憎悪でしかありえなかったということの意味する。直接的憎悪とは、相手の存在全体を一度は見ながら、相手もしくは自分の存在の否定に転じる態度であるから、デモーニッシュな汝が抱く憎悪とは区別されなければならない。だが、相手の存在と自分の存在のどちらが否定されても、デモーニッシュな盲目的憎悪に至るように思われる。それゆえ本発表は、実際にどちらかが否定されてしまえば直接的憎悪は霧消する、と主張する。これが第二のテーゼである。